

入院時の患者聴取を契機に術後制吐薬の変更を提案した例

プレアボイドとは薬学的ケアから患者の不利益（副作用、相互作用、治療効果不十分など）を回避あるいは軽減した事例を意味します。今回は、入院時の患者症状を契機にパーキンソン病の既往を聴取し、術後パスに含まれていた制吐薬の変更を提案することで、安全な薬物治療に貢献できたプレアボイドを紹介いたします。

患者背景

▶原疾患に対し手術目的で入院された患者

術後パス（抜粋）：

メトクロプラミド注 10mg/2mL 頓用：嘔気時



Iさん

持参薬確認時に手の振戦があり、患者より「パーキンソン病の既往（現在治療中断中）」を聴取しました。



薬剤師

情報共有ありがとうございます。パーキンソン病の状況について、神経内科へコンサルトします。



医師

【神経内科受診】
内服は不要だが、メトクロプラミドの使用は注意が必要とされた。

術後パスでオーダーされているメトクロプラミド注は症状が悪化する可能性があります。ドンペリドン坐薬または錠剤に変更するのはいかがでしょうか¹⁾。



ありがとうございます。それでは、術後の嘔気時にはドンペリドン錠を服用するように変更します。



その後、ドンペリドン錠が頓用（嘔気時）で処方され、術後は症状悪化なく経過した。入院時の持参薬確認時に手の振戦に気づいたことを契機に、治療中断中のパーキンソン病の既往を聴取し、患者の背景に応じた薬剤選択を提案することで、パーキンソン症状悪化リスクの回避に貢献できた。